

令和7年7月28日（月）

京都市社会教育委員会第2回読書専門部会摘録

協議事項1 家庭・地域（図書館等）・学校等の役割

（主な意見※）（※主な意見には、取組発表時の質疑応答での意見を含む）

- ・ 大人が、子どもの本の世界を広げるきっかけを用意していくことが大事
- ・ 面での取組に加え、対象を絞ったピンポイントの対策も考えていく必要がある
- ・ 家庭への働きかけは学校を通して行うことが一番届くのではない
- ・ 学校長や先生の読書活動に対する意識によって、忙しい中でもちょっとした工夫で、子どもや保護者への働きかけができる（子どもたちへの声かけや保護者の目のとまる場所に本を展示しておくなど）
- ・ 読書をするきっかけとして、文字を読むのが苦手な子どもには、作り手の思いも込められた紙の本だからこそその感触や手触り、光沢などに注目した取組があってもよい
- ・ 子どもの読書活動の充実には、司書教諭や探究的な活動を担う先生の関わりも大切
- ・ Teamsを活用した学校司書間の情報交流は、学校司書が孤立しないで活動ができてとてもよい
- ・ 青い鳥号（移動図書館）の取組は、地域に図書館がない子どもたちや保護者にとって大変有意義であり、継続してほしい
- ・ 公共図書館のサービス改善については、図書館としての目的など公益性とのバランスを考えながら、全館で一律の内容を進めるのではなく、地域のニーズに応じた図書館づくりをそれぞれの館で行うべき
- ・ レファレンスサービスなど、図書館の本来の機能も大事に、今後の図書館づくりを行ってほしい

<発言詳細>

○ アンケート結果が興味深い。小学生の本を読まない理由の自由記述にあった、「全部読んでしまって面白くないから」「ほとんど読んでいるから」という意見は、子どもが考える本の世界がとても狭いのではないかという懸念がある。大人が子どもの本の世界を広げるきっかけを用意していくことが大事。

「面白くないから」という意見については、もしかすると本をちゃんと読めていないからかもしれない。字面は追っていても、行間や文字の向こう側にある世界を読み取れず、つまらない作業になっているのかもしれない。

家で読まないという子どもの保護者にどういうアプローチができるか。多くは保護者に時間がないという理由かと思うが、「寝る前に読むと、子どもが落ち着いて寝ることができる」などのメッセージを伝えられたらよい。思春期で子どもと会話がない時期でも、本の話なら、現実世界と離れたことなので話ができるとか、そういった子育ての助けになるというメリットを言えたらいいと思う。

○ 校種が高校→中学校→小学校となるにつれて読み聞かせの経験があまりなかったという率が増えるのが気になる。8か月健診（令和5年4月から4か月児健診）のブックスタートの取組などで横の連携がようやくできたと思っていた。

面での取組に加え、「この親子に」「この年代に」とか、小学校・中学校・高校それぞれに、ピンポイントの対策も考えていく必要がある時代になっている。

○ 前回も家庭での取組はそれぞれの家庭によって異なるので働きかけが難しいという話があった。やはり保護者へのメッセージは学校を通して行うことが一番届くと思う。

読み聞かせボランティアの取組などもしているが、休み時間に先生から子どもたちへ声をかけるとか、懇談会の待ち時間に保護者の目につくところに本を置いておくとか、先生が読書についてどのくらい意識を持っているかで、忙しい中でも工夫してできる取組があると思う。

読み聞かせの取組では、5分ぐらいで読める本を用意しており、同じ本を4冊くらい用意して、子どもたちがどこからでも絵が見えるよう工夫している。低・中学年の参加は多いが、担任の先生の声かけにより参加人数に差が出ていると感じた。本好きの子どもは積極的に参加するが、あまり本好きでない子どもたちにこそ呼び掛けてほしい。

事務局 障害のある子どもたちの学習環境について、学校と家庭での連携の一例として紹介する。

総合支援学校小学部では、家庭と連携し、授業で使った絵本を家庭でも読み聞かせをするという取組を行っている。

子どもたちには、言葉のリズムや絵を通して学ぶことが有効なので、特に小学部の授業では絵本をよく使っており、使った絵本を担任から保護者に知らせると、家庭でも同じ本の読み聞かせをしてくれる。それぞれの子どもの学びのペースに合った学習ができるし、保護者もその子の実態に応じた本を先生が選んでくれるので参考になって良いと感じている。

○ 読書が好きだが、子どものころは、読んでいる途中でしんどくなってしまった記憶がある。読み切ることにプレッシャーを感じる子もいると思う。絵本の「絵」が読書への入口になるように、多様な子どもに応じた、異なる読書への入口があるはず。本の紙質や光沢など、良い本を作ろうとする作る側の思いや考えにも注目したい。文字を読むことが苦手でも、本の感触・手触りが本を読むきっかけになるかもしれない。

学校・家庭でなにができるかという視点とは、少し異なる意見になるが、集中することが困難な子どもなど、多様な子どもがいるなか、学校で本に向かうきっかけとなる取組も多様であるといいなと思う。

○ 中学生・高校生にとって読書は大切だが、アプローチが難しい。学校図書館にある本は、もう全部読んでしまっていると思っているかもしれない。

市図書館で提供されている電子書籍サービスと、学校図書館の蔵書などは、どのようにリンクしているのか。学校図書館にある本なら電子書籍で内容まで読めるのか。

事務局 現在提供している電子書籍サービスで、学校図書館にある蔵書をすべて読むことはできない。

電子書籍などのデジタルに関するサービスは、3種類整備している。

○蔵書検索機能に特化したカーリル（G I G A端末等から自校の学校図書館の蔵書検索が可能）

○府立図書館が提供する電子書籍（G I G A端末で読むことができる）

○ポプラ社の MottoSokka!（数校での試行実施。G I G A端末で読むことができる。）

○ 中学生・高校生には、友人や親しい大学生など、人のつながりの中で薦め合うことが大事で有効だと思う。

○ 学校でどうしたらいいか、という課題が中心になっているが、幼稚園・保育所などの就学前施設での取組も大事だと考える。保育所の懇談会で1歳児に絵本を読み聞かせすることが大事だという話をしたら、家で子どもに絵本を読むなんてカルチャーショックだと言われて、こちらがショックを受けた経験がある。

他の家庭がどのように過ごしているかはわからないので、知る機会が大事。小学校に上がってからは、「読める本」と「読みたい本」のギャップも出てくる。自分で読むもの、読んでもらうもののすみ分けも大事。教育熱心な家庭では、小学校からは自分で好きな本を読むように促す家庭も多いが、まだまだ何でも読めるわけではないので、保護者の読み聞かせも大事だと伝えている。

地域のボランティアの方による継続した読み聞かせは、いつもと違って新鮮な気持ちで聞くことができて良いが、先生による読み聞かせの取組では、長編小説も取り扱うことができるし、好きな先生に読んでもらえることで興味がわくという変化が期待できる。また、時々、別の先生に読んでもらうと、また違った本が読める。

ブックトークも有効だが、できる人が限られるため、ブックトークに関する研修に力を入れるとよい。

子どもの本コンシェルジュも、小学生までを対象としたスキルの高い方が多いので、中高生向けの対応ができるように、こちらの研修も必要だ。また、中高生は忙しいので、放課後の公共図書館の活用は難しく、学校図書館を充実してくれるといいなと思う。

事務局 学校図書館でも教科学習に関連した作者の本を集めて配架するなど工夫されている学校もある。

事務局 学校図書館では、児童生徒数に応じて必要な蔵書数が決められている。

本との出会いをすることが大事と考えており、読書担当専門主事が学校訪問の際に、授業で学校図書館を活用できる場面の提案や支援を行っている。

○ 子どもたちは自分が通う学校の図書室しか知らないだろうから、他の学校の図書室に足を運ぶような機会があると面白いと思うが、そういった取組はあるか。

事務局 学校間交流は実施しているが、図書室を活用されている事例は把握できていない。校外活動で市図書館などへ行くことはある。

○ いつもと同じ図書館の本の並びをみていると、目がなじんでしまうので、違う学校の図書館等を訪れると新鮮な目で本に触れることが出来るのではないかと思う。

事務局 成果指標として、これまでは不読率を主に掲げてきたが、本日の協議において例えば読み切ることの難しさのご指摘もあった。不読率は無視できないとしても、そのみではなく、本との出会いや、本への親しみなどの新しい視点が必要かと思うので、引き続き協議いただきたいと考えている。

協議事項2 多様な子どもたちの読書機会の確保

(主な意見※)(※主な意見には、取組発表時の質疑応答での意見を含む)

- ・ 日本語指導が必要な子どもへの取組について、外部機関や民間団体などとの連携についても、学校任せにすると先生や学校司書の力量任せになってしまうので、学校と専門機関をつなぐ人材が必要ではないか
- ・ 支援が必要な子どもたちの読書活動における課題への対応として、本のある場所への物理的なアクセス、内容や情報へのアクセスをいかに実現できるか
- ・ 総合支援学校は、在籍している子どもの年齢が幅広く、また障害も様々なので、全ての子どもたちに合った本を学校図書館に所蔵することが難しい
- ・ 読み聞かせの際に子どもの興味関心を惹く工夫がある電子書籍がある方が良い
- ・ 1人1人の個性に向き合っていく教育は、本来の教育のあり方
- ・ 支援が必要な子どもも、本に興味のある子は、自分で本を選ぶ仕組みをつくり、選んだ本の情報を蓄積するといいいのではないか

事務局 本市の総合支援学校は、地域制・総合制で、家に近い地域の学校に通うことになっている。できるだけ「地域の子どもは地域で育てる」ということを実践し、在籍する子どもの年齢の幅が広く、障害も様々である。

その中で、音が鳴る絵本、大型絵本、触る絵本が多く使われている。

授業では、絵本の読み聞かせをしながらコミュニケーションや算数の狙いに迫ったり、登場人物の様子を言葉で表現したりして、1つの本を様々な教科の学習につなげる取組を行っている。

選書会では、教室に本を並べて、読みたい本の前にシールを貼ってもらい、選書の参考にするなど、子どもたちの興味関心に沿った図書館運営に取り組んでいる。

担任や校長がお勧めする本をおすすめポイントなどを書いて掲示する取組は、身近な人がどんなことに興味関心があるのか、また本に興味をもつきっかけとなるなどの効果がある。

昼休みにボランティアの方に本を読んでもらう取組や、配架にも工夫し、小学部用の本は本棚の低い位置に並べるなどしている。

校外学習で地域の図書館に行くこともある。図書カードを作ったり、好きな本を探して読んだりしている。家庭で初めて地域の図書館に行くのはハードルが高い場合もあるため、学校でまず取り組み、図書館での様子や楽しむための工夫を家庭に共有している。子どもにとっても、ここに行けば好きな本がある、という経験をする 것도大切である。

課題は、2つ

- ・本へのアクセス 障害の状況により本のある場所へのアクセスがしづらい子がいること。
- ・情報や内容へのアクセス（文字を読みづらい、自分で本を選べない、など）

肢体不自由のある育成学級の子どもでいうと、教室が1階にあっても、図書室が2階や3階にあると、行きづらい場合がある。

階段昇降機を使えば行けるが、行きづらは解消できていない。その点、カーリルは自校の蔵書について本の表紙も合わせて探すことができるので、主体的に選書ができて良いと思う。

○ LL ブックやマルチメディアデイジーは配備されていると思うが、実際にどれくらい使われているか。また、1階の廊下など、子どもがアクセスしやすい所に本を置くなどの工夫がされている学校はあるか。

事務局 総合支援学校の図書館では、絵本もあるが、高校生など、年齢が高い子どもに合った本も置いている。

デイジーや電子書籍については、文字を読むことが難しい子どもに音読機能があるので有効。

ただ、小学部段階で絵本に興味関心がある子どもへの電子書籍の充実に対しては十分でないかもしれない。また、絵本の読み聞かせは、機械的な読みではなく、子どもの興味関心を惹くような読み方の工夫のあるコンテンツがあるといいなと思う。

教室に図書コーナーを設けたり、空きスペースに本を並べたりしている学校もある。

○ 学校で読み聞かせを行っているが、様々な家庭環境に配慮し、例えば、家族が登場する場面を避けるといったこともあるが、選書の難しさが課題。また、育成学級の場合は、クイズを手作りしたり、目で楽しむことができるもの、動きがあるものを作ったりしている。

○ 総合支援学校では、一人一人の個性に向き合っていくという本来の教育の在り方を真摯に実践いただいていると思う。

一律にこういう本がいいよとか、パッケージとしては提案しにくいですが、醍醐中央図書館のジュニアライブラリアンの取組は、選書会で子どもたちが自発的に取り組んでいて、いい取組だと思う。

支援が必要な子どもにも、本に対する興味がある子には、親とは異なる目線で「この本が良い」というものがあるはず。個性に応じて自分で本を選ぶ仕組みや選んだ本の情報などを蓄積する仕組みがあるといい。

事務局 ご指摘の本の情報の蓄積としては、毎年度、総合支援学校や育成学級で使用する教科書については、文部科学省の検定教科書や著作教科書に加え、絵本や図鑑、書籍等の一般図書からも採択を行っているが、採択図書一覧を学校司書に共有し、各学校の蔵書選定の参考にしてもらう工夫も行っている。

協議事項3 デジタル環境の下での読書活動の推進

(主な意見※)(※主な意見には、取組発表時の質疑応答での意見を含む)

- ・教育D Xが進む中でも、読書の分野に無理にそれを持ちこまなくてもいいと思うが、子どもたちが読む本の選択肢を広げることは重要である
- ・保存や維持管理、著作権の問題で、電子書籍が万能であるわけではない。選択肢や使い分けが広がるなどの視点で電子書籍を選択していくとよい
- ・書誌事項等を調べるという点で、デジタルは有効なので、カーリル（蔵書検索システム）はとても有用
- ・デジタルデバイスを使用するときの子どもの身体性への影響も考慮したガイドラインの作成など、注意点やその対策とセットで進めていくことが必要
- ・デジタル化が進むとかえってアナログの良さを感じることもある。学校でG I G A端末の活用が進む中、電子書籍は必要に応じて利用するのがよい

○ アンケート結果を踏まえると、中学生は電子書籍が好きなのかもしれないが、だからといって紙の本の予算を削ることはできないと思う。予算には限りがあるので、何を優先すべきかの判断は難しい。

○ DX化は様々な分野で進んでいるが、無理に本に対して持ち込まなくても良いと思っている。ただし、大事にしなければいけないのは、子どもたちにとって読むことへの選択肢が広い、読める範囲が幅広く準備されていることである。

いわゆる「ジャケ買い」といわれるように、装丁買いをする子は多いと思う。本は、単に情報を得るためだけではない。目的に応じて、本と電子書籍とを分けて選べるとよい。

電子書籍の課題として、個人的に感じているのは、保存・継承の問題。50年後に、紙の本は残るが、電子書籍は果たして読める状態で存在しているのか。

○ 自身に関わっている文庫も、保存・継承の問題から、ファイルをデジタル化したが取扱いがとても難しい。

著作権上の問題などで電子化できない図などがあり、電子書籍だと逆に中途半端なものになることもある。選択肢が広がることが重要であって、一律に網羅的に電子化をする必要はなく、紙の本をベースにしながら電子書籍だと使い方が広がるなどという視点で選択していくとよい。

書誌事項等を調べるという点では電子はとても有効なので、カーリルはとても便利な機能。

一方で、デジタルデバイスを使うことによる子どもの身体性への影響は課題があると懸念する。ストレートネック化など、身体への影響があるのではないか。

成長過程の子どもへのデジタルデバイスの推進には、使用にあたって気を付けておくべきことや姿勢等の改善のためのストレッチなどを示したガイドラインの提示などの対策との抱き合せが必要と考える。

○ デジタル化が進むと余計に紙の本の良さを感じる。先日久しぶりに調べもののため辞書を開いたが、調べた言葉に関する情報がいろいろ書いてあって、改めてアナログの良さを感じた。ページを開く「間（ま）」など、感覚的なものだが、とてもいいなと思う。

授業でもGIGA端末を活用しているので、電子書籍は必要に応じて利用するというのがよいのではないかな。

事務局 皆様の貴重な意見を踏まえ、今後の答申の作成に向けて進めていく。

なお、第1回・第2回の専門部会での議論の内容について、8月の社会教育委員会議で概要の報告を予定している。

出席者：

読書専門部会委員

部会長： 松田 規久子委員（京都新聞社文化部編集委員兼論説委員）

副部会長：岩崎 れい委員（京都ノートルダム女子大学教授）

伊住 禮次朗委員（茶道総合資料館副館長）

豊田 まゆみ委員（一般社団法人京都市地域女性連合会理事）

学校指導課

林 和津慎 教育委員会指導部学校指導課 教育 I C T化推進担当課長

合田 清志 教育委員会指導部学校指導課次世代教育推進担当係長

総合育成支援課

藤田 昌資 教育委員会指導部総合育成支援課首席指導主事

山田 真康 教育委員会指導部総合育成支援課総合育成支援係長

生涯学習部

有澤 重誠 教育委員会生涯学習部長

松下 誠太郎 教育委員会生涯学習部首席社会教育主事

嶋本 公一 生涯学習部学校地域協働推進課長

小田 有希子 生涯学習部家庭教育事業係長

米山 貴之 教育委員会生涯学習部政策企画担当係長

生涯学習振興財団

福田 はる奈 生涯学習振興財団図書館担当課長

※職名等は令和7年7月28日時点